

現代社会の危機と若者犯罪-「よい子」はなぜ犯罪を起こすのか- (その1)

前 島 康 男*

The crisis of modern society and juvenile delinquency Why *Yoiko* commit crimes

MAEJIMA Yasuo

Maniwa (2009) claimed that “crimes are mirrors that reflect the era and society”. It is often said that modern society is formed based on the 1980s when there were a lot of social contradictions. Since the 1980s, *Yoiko* has committed several crimes such as the Aum Shinrikyo incidents, the cases of an attack on homeless, parricide, bullying-related suicide, and indiscriminate murder.

Today’s Japanese society, where the principles of neoliberalism widely spread, faces the turning point. Especially, in the corona crisis, we are required to consider about what the desirable form of society should be.

This paper explores the theoretical relations between *yoiko* and juvenile delinquency. The introductory chapter is organized as follows.

- (1) The history and characteristics of postwar crimes
- (2) The various aspects and characteristics of crimes caused by *yoiko* in around the 2000s.
- (3) The reasons why *yoiko* commit crimes.

キーワード：現代社会、若者犯罪、「教育家族」、「よい子」

Keyword: modern society, juvenile delinquency, education-minded parents, *yoiko*

はじめに…課題と方法

1. 問題意識

「犯罪は、時代と社会を写す鏡」(間庭充幸)とされます。私が、最初に青少年の犯罪に興味を持ったのは、鹿川裕史君のいじめ自死事件(1986年)、いわゆる「葬式ごっこ」でした。このあといじめ自死事件は、計4回の社会問題化を経てますます大きな社会問題になります1)。

これらのいじめ自死事件や、神戸連続児童殺傷事件(1997年)、いわゆる「少年A」の起こした事件、あるいは、栃木県黒磯市女性教師刺殺事件(1998年)の犯人は、いずれも思春期真っ盛りの14~15歳の「普通」の少年達でした。これらの事件の背景には、戦後第三の少年犯罪=「非行」ブームにおける「荒れる中学校、荒

れる中学生」の問題がありました。

そして、「女子高校生コンクリート詰め殺人事件」(1989年)を嚆矢とし、「佐賀県バスハイジャック事件」(2000年)、「岡山県野球部員金属バット殺傷事件」(2000年)、および「奈良事件」(2006年)、「会津若松事件」(2007年)をはじめとする「親殺し」の犯人は、17歳を中心とする「よい子」の高校生がほとんどです2)。

さらに、親殺しとしての「土浦事件」(2004年)、無差別殺傷事件としての「秋葉原無差別殺傷事件」(2008年)、そして、「相模原障がい者殺傷事件」(2016年)の犯人は、20歳代半ばの進学高校出身者や親が教師の「よい子」が犯人でした3)。

以上のように、時期によって事件を起こす年齢層は、次第に年齢の高い者も犯罪を起こすようになりますが、いずれも、戦後1980年代以降の「管理社会化時代(高

*理工学部共通教育群教授 Professor, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

度消費社会)」「(間庭充幸)に生まれています。そして、家庭は「教育家族」4) (中内敏夫) の中で育ち、学校教育も「開かれた競争」から「閉じられた競争」へ、「社会へ開かれた途」から「競争と抑圧化」(久富義之)へと変化する中で、「競争と管理」、「規律と管理」(M. フーコー)の学校および家庭生活を送りながら育つ世代です。

2000 年前後の事件、すなわち「オウム真理教事件」(1995 年「地下鉄サリン事件」までの一連の事件)、「親殺し事件」、「ホームレス襲撃事件」、「いじめ自死事件」の続発⁵⁾、および、一連の「無差別殺傷事件」などの犯人は、いずれも、普通の「よい子」が起こした事件と言われています。

そうすると、何故、普通の「よい子」が事件を起こすのかその真相(=深層)を知ることが重要な課題になります。

2. 課題と方法

現代日本社会(1980 年代以降)は、新自由主義社会です。次第に、市場万能社会となり、社会と学校にも市場の論理、「管理と競争」の論理が浸透し、激化するとともに、小さい政府のもと「自助、共助、公助」の中で、「公助」は削られ、「自助努力」が煽られ、結果は「自己責任」という非情な社会になっています。また、格差と貧困も進行しています。

このような現代社会の矛盾は、コロナ危機の中でより一層進行しています。現代社会は、コロナ危機の中で矛盾がより鮮明になり、新自由主義社会のまま進むのか、あるいは、新自由主義社会の乗り越える新しい社会を構想するかという危機=分かれ道にあります。そうすると、若者を中心に自死が急増し(「東京新聞」2020 年 9 月 29 日付朝刊参照)、登校拒否なども戦後第二の急増期に入っていると言うこと、また、秋葉原事件や相模原事件などが現代社会の時代性と社会の矛盾を写していると言う点を踏まえながら、現代の若者犯罪の深層を追究する必要性が出てきます。本論では、その点を特に「よい子」の犯罪に焦点を当てて分析していきます。それは、いわゆる「よい子」に現在社会の矛盾がストレートに現れていると考えられる事と「よい子」の犯罪の諸相に現代という時代性、社会性がよく反映されていると思われるからです。

本論文で追究する理論的課題は、第一に、普通の「よい子」というものは何かの究明。第二に、「よい子」が

犯罪を起こす社会的・歴史的・構造的原因の究明、第三に、「よい子」が犯罪を起こすきっかけと主体的要因の究明です。

この三つの理論的課題について、私は、拙著『登校拒

否・ひきこもりからの^{たびだち}“出発”-「よい子」の苦悩と自己形成-』でふれた、「よい子」の苦悩と矛盾に学び、焦点を当てつつ、犯罪学の先行研究(特に、間庭充幸、芹沢俊介等…敬称略)と犯罪当事者の手記(加藤智大ら)に批判的に学びながら迫っていきたいと思います。

その場合、犯罪社会科学と教育学(養育学)等の先行研究の批判的摂取が役に立ちます。

* 以下、章構成は以下ようになります。

序 章：戦後若者犯罪の歴史と特徴

第 1 章：秋葉原無差別殺傷事件事件の特徴と論点

第 2 章：親殺し事件の多発と特徴

第 3 章：ホームレス襲撃事件の多発と特徴

第 4 章：オウム真理教事件について

第 5 章：いじめ自死事件について

第 6 章：相模原障害者殺傷事件について

第 7 章：「少年 A」はなぜ事件を起こしたのか

補論Ⅰ：若者犯罪と発達障害がい

補論Ⅱ：若者犯罪と死刑制度

終 章：まとめと今後の課題

文献一覧

序章：戦後若者犯罪の歴史と特徴

はじめに…本章の課題について

若者犯罪といってもなぜ若者が犯罪を起こすのか、その背景=原因をつかみつつ、きっかけはなんだったのか、また、犯罪を起こした犯人の人格的な特徴は何かなどを把握することによって、犯罪の深層により近づいて行くことができると思います。

その場合、第一に、戦後若者犯罪の歴史的把握がまず必要です。この点私は、間庭充幸の一連の著作に深く学びたいと思います⁶⁾。

また、第二に、「はじめに」でふれ、また、本章第 3 節で詳しくふれるように、戦後 1980 年代の新自由主義期以降、日本の学校教育への「偏差値」という一本の物差しの本格的導入とそれに基づく、子どもの振り分け、およびそのための「競争と管理」の強化、さらには、家

庭の学校の下請け化が進行します。そして、少年犯罪＝「非行」の第三の波（1983 年～）に象徴的なように、子どもの心と身体がそのような「競争と管理」に激しく反応し、反発します。

そして、この頃からの青少年の犯罪は、戦後直後あるいは、高度経済成長期とは異なり、いわゆる「よい子」の犯罪が主流となります。そうすると、「よい子」の犯罪はどのようなものがあり、なぜ、「よい子」が犯罪を起こすのかの究明が重要な理論的課題になります。

第 1 節：戦後若者犯罪の歴史と特徴

戦後若者犯罪は、どのような歴史の変遷をたどるのでしょうか。また、それぞれどのような特徴を持っているのでしょうか。

この点を主に、間庭充幸の著作に学びながら、辿ってみましょう。

間庭は、戦後の若者犯罪を次の五つの時期に分けています。

第 1 期：戦後民主化時代＜解放と再生＞－反抗型（1945 年ごろ～）

第 2 期：高度成長時代＜孤独と漂流＞－離脱型（1960 年ごろ～）

第 3 期：管理社会化時代＜役割と機能＞－爆発型（1980 年ごろ～）

第 4 期：高度情報化時代＜虚構と自閉＞－ゲーム型（1990 年ごろ～）

第 5 期：電子ネット社会化時代＜孤立と集列＞－ネット型（2003 年ごろ～）（間庭 2009：228-231）

なお、戦後の少年犯罪＝少年「非行」の波は、次のようになっています。

第一の波-1951 年頃～（生活型非行）。

第二の波-1964 年頃～（犯行型非行）。

第三の波-1983 年頃～（遊び型非行）。

第四の波-1998 年頃～（非社会的非行）。

それでは、各時期の特徴を間庭に学び叙述しましょう。

第 1 期は、戦後民主化時代です。この時期は、戦前の天皇制絶対主義および軍国主義国家によるアジア侵略の 15 年戦争から、国民とアジア諸国民の多数の犠牲を払ったのちに日本国民も解放され、同時に日本を占領したアメリカの影響を強く受けた国になります。

戦前の大日本帝国憲法とは基本的理念が異なる日本国憲法が制定され、戦争の傷跡や貧困を抱えながら、女

性にも初めて選挙権が与えられるなど、明るい色が基調の国民の歩みが始まります。

戦前の天皇制絶対主義国家への忠誠（教育勅語＝「期待される人間像」、および「日の丸」、「君が代」に典型）や人間の主体性を抑圧するような日本の集団主義（全体主義？）は、今日でも克服されず、「長い物には巻かれろ」「出る杭は打たれる」「郷に入りては郷に従え」などという風潮は残っているものの、それでも、戦後は、新しいものや民主化を求める風潮には勢いがありました。

この「1 期」の民主化時代には国家的統制や伝統的価値観の弛緩から、アノミー的混乱や窮乏の中ではあったが個の欲望を権利としてとらえ、守旧的なものにがむしやりに反抗する『放縦で無軌道』な風潮が強く現れました（間庭 2009：228）。

従って、この時期の若者犯罪を「反抗型」と呼びます。

なお、この時期の若者犯罪に「光クラブ事件」（1949 年）および「荒川水路バラバラ事件」（1952 年）などがあります（間庭 2005：179-180）。

第 2 期は、高度成長時代です。1955 年に保守が合同し、また社会党も合同する中で、いわゆる「55 年体制」になるとともに、高度経済成長が始まります。この時期は、1973 年の「オイルショック」まで約 20 年続きます。日本経済が驚異的に成長し、日本中に商品が溢れ、資源の無限信仰も生まれ、「消費は美德」（金儲け主義）の風潮が生まれ、金のためには何をしても構わないという考えも生まれます。一方、水俣公害を始め日本列島が公害列島と言われたようにマイナスの側面も生まれます。

「若者の犯罪にもこの風潮を体現したかのような、人間性をつき離し、伝統的モラルから離脱した非情で自己中心的な犯罪が多く見られた。このような犯罪を『離脱型』と呼びました（間庭 2009：228-229）。

なお、この時期の犯罪には、「杉並少年通り魔事件」（1964 年）、「永山則夫連続殺人事件」（1968 年）、「サレジオ高校生殺人事件」（1969 年）、「集団就職少年暴行殺人事件」（1971 年）などがあります（間庭 2005：182-184）。

第 3 期は、管理社会化時代です。1980 年ごろから約 10 年間を指します。この時代、「能力主義」7) が経済界主導で大々的に導入され、人間の多様な能力を計る一つの物差しである「偏差値」8) が、人間の能力を規定するかのような風潮が次第に学校教育を覆うようになりました。そして、学校教育での差別・選別の「受験競争＝受験戦争」も次第に激化していきました。子どもや

若者は、この息苦しさを、「非行」、校内暴力、いじめ、登校拒否、自死などで「行動化」とともに、「能力主義」の抑圧により、いつ爆発するかわからない「爆発型」の若者犯罪も増加しました。すなわち、「非行」の第三のブーム、いじめの日常化といじめの第一の社会問題化（前島 2015：264-266）、登校拒否の戦後第一の激増期（前島 2020：100）などがそれです。

この、「管理社会化時代」の「競争と管理」の抑圧構造は、形を変えながらもその後の犯罪の基底構造（＝基層）として存在します。また、この時期は、戦後若者犯罪の分水嶺と言えます。

少年犯罪＝少年「非行」も戦後第三の波を迎えますが、この波は、第一及び第二、さらにその後の第四の波と比べても最も巨大な波でした。

なお、この時期の若者犯罪には、次のようなものがあります。

「開成高校生殺人事件」（1977 年）、「祖母殺し高校生自殺事件」（1979 年）、「金属バット両親惨殺事件」（1980 年）、「横浜浮浪者襲撃事件」（1983 年）、「富士見中学いじめ自殺事件」（1986 年）、「女子高校生コンクリート詰め殺人事件」（1988 年）。

第4期は、高度情報化社会です。このころから、中学生以上を中心にゲーム機を持つものが増えるとともに、テレビやゲーム機によってゲームで遊ぶことが子どもたちの心をとらえます。

第3期の管理社会化の原理は、この高度情報化社会になっても一層強化されていきます。

「管理は情報技術の高度化により人間の内面まで浸透し、虚構を現実のように見せる情報操作によっていよいよ巧妙化」（間庭 2009：230）します。まさに「情報管理社会」です。

現実の社会から逃避し、閉じこもりがちな若者にとっては、ゲームや情報の作り出す、バーチャルな世界がそのままリアルな世界と勘違いする心情を強化します。

若者たちは、「競争と管理」の「受験管理社会」の抑圧をバーチャルなゲームの世界で「自由奔放」に振る舞うゲームのヒーローに仮託することで「解放」しようとしています。

「しかもいかにかっこよく犯罪を表現するか（解放するか）がせめてもの自己主張であり、自己の存在証明とな」（間庭 2009：230）ります。このような第4期の犯罪を「ゲーム型」と呼びます。

この時期の犯罪には以下のようなものがあります。

「東京・埼玉少女連続誘拐殺人事件」（1989 年、犯人は宮崎勤⁹⁾）、「愛知・岐阜河川敷少年リンチ殺人事件」（1994 年）、「オウム真理教地下鉄サリン事件」（1995 年、本書第5章で詳述）、「神戸児童連続殺害事件」（1997 年、本書第7章で詳述。犯人は「少年 A」¹⁰⁾）、「西武バスジャック殺傷事件」（2000 年、犯人の「少年は、高校入学直後不登校で退学、家に閉じこもり両親への暴力がひどくなり、入院治療を受けたりしていた。もともと学校の『成績は優秀』だったが、中学時代にいじめられたり、志望校に入れなかった挫折感もあったようである。犯行について少年は『注目され……ヒーロー的存在』になりたかったと証言した。また『殺人こそ正義』などといい、『バスを乗っ取ったときは『三国志』の英雄・劉備になった気分だった。彼のように生きたかった』と話した。少年はインターネットに熱中していたというから、この事件も蓄積された抑圧を『劉備』に託しつつ虚構世界（→現実化）で晴らすことで自分を取り戻そうとしたのかも知れない。（間庭、2009：193-194）。

「岡山母親・友人殺傷事件」（2000 年、「極めて短絡的かつ自己中心的なものである。同時に『ポケモン』やゲーム機に熱中し、本人が書いた文章『闇の狩人』には生き物を平然と殺害する場面があるところを見ると、やはり情報空間を作る虚構と現実のアワイに生きていたといつてよかろう」（間庭 2009：194）。

「大阪教育大附属池田小襲撃事件」（2001 年）¹¹⁾。

第5期は、電子ネット社会化時代です。この時期、次第に情報媒体が、テレビやビデオからインターネットやケータイに移行します。そして、ケータイが彼らの身体の一部になります。また、彼らの仲間の作り方、人間関係もインターネットやケータイでつくられます。「とくに若者にとってはネット社会（ネット空間）が唯一の生きる世界とさえなっている。これをネット社会化時代として高度情報化社会と区別しました。

もちろん、このような段階になっても管理社会の原理をはじめ、IV期で指摘した情報化社会の問題点は、変わるところかむしろ拡大強化している」（間庭 2014：231）。

この時期の犯罪には、以下のものがあります。

「東京東村山市少年ホームレス殺人事件」（2002 年）、「川崎ホームレス暴行傷害事件」（2003 年）、「長崎市幼児突き落とし殺害事件」（2003 年）、「佐世保児童殺害事件」（2004 年）、「秋葉原無差別殺傷事件」（2008 年、本

書第1章で詳述)、「いじめ自死事件の第三の社会問題化」(2006年から、本書第5章で詳述)、「相模原障がい者殺傷事件」(2016年、本書第6章で詳述)。

この、ネット社会化時代の典型的な事件は、「秋葉原無差別殺傷事件」です。詳しくは、第1章でふれますが、犯人加藤智大が、ネット上での「なりすまし」や「荒らし」に対して、「しつけ」として事件を起こしたと考えられる点に注目しておきたいと思います¹²⁾。

第2節：2000年前後以降の「よい子」の若者犯罪の諸相と特徴

1980年代以降の「管理社会化時代」において、「偏差値」という人格を図るたった一本の物差しが、学校教育を支配し始め、次第に経済界の人材育成要請が学校教育を覆い、家庭がその下請け機能を担うような「受験管理社会」が激化します。そうすると、子ども・若者もその影響を受け、その抑圧を犯罪としても「行動化」するようになります。

特に、その若者犯罪は、2000年を前後する頃から普通の「よい子」の犯罪が目立つようになります。例えば、オウム真理教の一連の事件には、東大理学部や慶応大学医学部ないし早稲田大学理工学部卒業などの理系の「偏差値エリート」達が目立ちました。また、一連の親殺し事件では、犯人は、進学高校の高校生が目立ちました。さらに、ホームレス襲撃事件でも普通の「よい子」が犯人になる例が多くなりました。また、「秋葉原無差別殺傷事件」の犯人加藤智大は、青森県下トップの進学高校青森高校出身です。

以下、本節では、「秋葉原無差別殺傷事件」「親殺し事件」「ホームレス襲撃事件」「オウム真理教事件」「いじめ自死事件」「相模原障がい者殺傷事件」および『少年A』の事件について、それぞれ「よい子」が関わった事件であることを紹介します。

(1)「秋葉原無差別殺傷事件」

2008年に「秋葉原無差別殺傷事件」を起こした犯人加藤智大は、「教育家族」の「教育ママ」である母親に、虐待に近いしつけをされ「よい子」に育てられます。

母親自らが、青森県下トップの進学高校である青森高校出身であり大学進学をめぐる挫折経験を踏まえ、長男である加藤智大に青森高校進学から北海道大学工学部進学というルートを引き、幼児の頃から徹底的なス

バルタ教育を施します。

加藤智大は、そのエピソードとして、以下の例を挙げています。

1. 風呂に入っている時に掛け算九九の練習をさせられ、間違えると風呂に沈められ、死ぬ思いをした。
2. 雪の日に、歩いて家に帰り、靴の中が雪で濡れていると、罰として裸足で外に立たされた。
3. 夕飯を食べるのが遅いことに対して、食べかけを広告チラシにあげられる「しつけ」をされる。さらに加藤がそれを食べられないことに対して、口にそれを詰めこまされる「しつけ」をされる¹³⁾。

加藤は、その結果、小中学校では、成績もトップクラスで、母親ののぞむ進学高校青森高校に入学します。しかし、加藤が母親ののぞむ「よい子」であったのはそこまででした。高校入学時点で「よい子」の加藤は、ある意味息切れ症状を起こします。

その加藤が、なぜ「秋葉原無差別殺傷事件」についての詳しい分析は第1章で行います。

(2)「よい子」の「親殺し事件」の続発について

2000年まではほとんど年に1件ほどだった「親殺し事件」は、それ以降少しずつ増え、2006年から2013年にかけて、8年間で多い年で9件、平均6件強で50件発生します。なお、殺害された対象者は、母親が6割、父親が3割、祖父母が1割となっています。

犯人は、「よい子」が少なくありません。

例えば、「奈良事件」(2006年)では、医師の長男として生まれ、将来は父と同じ医師になることが期待された、高校1年の息子(東大寺学園)は、家に放火し母親(継母)と兄弟二人を焼死させています。また、「会津若松市事件」(2007年)では、中学校時代は、学習も拔群、スポーツも拔群の成績を残した進学高校(会津高校)1年の男子が母親を殺しています。

このように、「親殺し事件」を読み解くキーワードは、やはり「教育家族」の「よいこ」です。この点の詳しい分析は第2章で行います。

(3)「ホームレス襲撃事件」

1980年代以降、「路上生活者襲撃事件」「浮浪者襲撃事件」が発生しますが、その犯人は、一般的に学校生活から落ちこぼされた少年が中心でした。それが、変化するのが、2000年前後からです(間庭、)。

普通の「よい子」および若者が、「ホームレス襲撃事件」を起こすようになります。

例をあげましょう。

東京都墨田区と中央区にかけて夜間、連続して野宿労働者が襲撃される。金属バットで頭を殴られたり、襟首をつかまれ約30メートル引きずられた人もいた。墨田区亀沢の高架化で寝ていた小茂出清太郎さん(63)が内臓破裂などで死亡。3人が負傷。その後、大学生(18)、アルバイト店員(19)、会社員(20)の3人が逮捕。「日々の生活にいらいらしていた」「殴るとスカッとするのでストレス発散のためやった」などと供述¹⁴⁾。この点の詳しい分析は、第3章で行います。

(4)「オウム真理教事件」

1995年の「オウム真理教地下鉄サリン事件」で一応の結末を迎える一連の「オウム真理教事件」の犯人で目立つのは、東大理学部や慶応大学医学部および早稲田大学理工学部出身者などの理系の「偏差値エリート」です。もし、「オウム真理教の地下鉄サリン事件」が起らなかったら、オウム真理教などの新新宗教に惹かれていった若者は、さらに後を絶たなかったでしょう。これらの、「偏差値エリート」の「よい子」がなぜ「オウム真理教」などの新新宗教に入信したのか、あるいは、なぜ、一連の凶悪な事件を起こしたのかの究明は、現代社会の危機と若者犯罪、とりわけ「よい子」がなぜ犯罪を起こすのかの究明にとって、格好の素材を提供していると考えられます。

以上の点については、第4章で詳しく分析します。

(5) いじめ自死事件

いじめ自死は、1980年代の半ばから起こり始め、これまで約300件起こっています。本書では、その中で、「よい子」のいじめについて分析します。

「よい子」のいじめについて実例を紹介しましょう。

「僕のいじめ体験」

僕はいじめられたことがある。小学校5年から6年にかけてのことだ。クラス替えて、5年から新しいクラスメートができたのだが、その中のケンカ好きなAくんを目をつけられてしまい、ことある度に殴り合いのケンカをしていた。そして、ケンカが嫌になった僕が負けを認めると、その後はいじめられる毎日が続いた。さらに、

A君だけでなく、クラスで人気のあったB君までいじめを始めた。

A君は、クラスの嫌われものだった。それに対して、B君は、顔もよく、サッカーもうまくて、成績もよかったのから、クラスで人気があった。A君のいじめは、僕の成績に対する妬みからくるものだとわかっていとし、ケンカというプロセスがあったこともあり、なんか、納得のいくものだった。いじめも単純な暴力や嫌がらせで、子供じみていた。一方、B君のいじめは、理由もわからず、突然に始まった。B君は、冷笑しながら、僕を殴り始め、僕をバイキンのように忌避した。僕は、自分がなぜB君にいじめられなければならないのか、どうしてもわからなかった。B君は、いつも、冷たく笑って、人をいじめた。人をさげすんだ目で薄笑いを浮かべて。僕には、それが、ものすごく恐ろしく思われた。自分を軽蔑する態度に、僕は自分の存在が否定された気がして、コンプレックスに悩まされることになった。

いじめは、僕の人格形成に大きな影響を与えた。周りを気にして何もできない。自分より優っている人への強いコンプレックスを持ち、そういう人とはうまく接することができない。目立つことを嫌う。これらは、いじめの時から強まり、今もその呪縛から逃れられないでいる」(熊本大学法学部3年生、男)(前島、1995:34-35)。

ここでは、成績も良くサッカーもうまく、クラスで人気のあるB君のいじめが、「よい子」によるいじめの典型です。「よい子」がなぜいじめめるのかの詳しい究明は、第5章で行います。

(6)「相模原障がい者殺傷事件」

「相模原障がい者殺傷事件」(2016)は、犯人植松聖が、自らの生い立ちについて語ることを頑なに拒んでいるためもあり、犯人の生い立ちについて、明らかにすることに対して一定の困難があります。しかし、植松の父親が、教師であり母親が漫画家であること、植松自身が一人っ子の長男で帝京大学教育学部出身であり、教師を目指していたことなどから、私は、この事件もいわゆる「よい子」の犯罪であったのではないかと類推しています。詳しい分析は、第6章で行います。

(7)「神戸児童連続殺傷事件」＝「少年A」の事件

「神戸児童連続殺傷事件」(1997年)の「少年A」も

「よい子」残した事件の文脈で捉えられるのではないかと考えられます。この点、「少年 A」を「発達障がい」の文脈で捉える著書も存在するのでそれらの研究の批判的分析も踏まえて詳しく論じます（第7章、及び補論 I）15）。

第3節：「よい子」はなぜ犯罪を起こすのか

第2節で紹介した「教育家族」の「よい子」がなぜ様々な犯罪を起こすのでしょうか。その経緯を知る上で、次のある学生の手記が大変参考になります（なお、「よい子」と犯罪に関して扱った文献を文献紹介に上げておきます）。

私と「よい子」と家族

熊本大学法学部 A 子（1999 年入学）

私は、「よい子」についての講義がとてつらかった。高校までの私はまさにそれだった。本当は私の人生なんてカラッポだったんだと悲しくなってしまう。大学に入り親元を離れることでようやく「よい子」の自分を壊そうと動き始めることができた。これからの自分づくりにつなげるためにも、「よい子」の過去を振り返ろうと思う。

私の家はいわゆる高学歴の一家である。両親とも進学校卒業、そして大学を出ているし、祖母も名門高校を卒業している。親類も同じような高学歴だ。私は三姉妹の真ん中だが、三人とも地元の進学校に入り、そして姉は私と同じ熊本大学である。地元では「優秀な姉妹」として言われていたし、祖母は聞かれもしないのに私たちの学校のことを知人に話したりしている。小さい頃から三姉妹の中でも私が一番可愛がられていた。理由はいろいろあると思う。よく言うことを聞く、反抗しない、まじめ、そして頭がいいことなどである。まさに「よい子」の典型だったように思う。私はと言うと親にほめられるのはうれしかった一方で、他の人に私のことを自慢げに話す親、特に祖母に嫌悪を感じてはいた。中学校まではほとんど努力しなくても成績がよかったが、高校に入ってから自分より頭のいい人が大勢いることを知ってショックを受け、とてもあせったことを覚えている。高校では中学の時にはなかった順位の張り出しがあり、それが余計プレッシャーになった。親は「A 子は実力があるから大丈夫。がんばって」ということしか言わなかった気が

する。そして私は真面目に予習し、テスト勉強もちゃんとした。そしてだんだん順位が上がるにつれて、家では余計プレッシャーがかかってきた。「めざせ九大である」。このころの私は周りが見えていなかった。でも高校一年生の冬、友達関係がうまくいってなかったことなどもあり、家で爆発してしまった。「クソバカ」「死ね」「殺す」、壁は蹴る、殴る、ドアは乱暴に閉めるなどとにかく当たりちらした。けれど。ここが私が「よい子」であった所だと思うが、私が荒れてる理由を母たちの言うことができなかった。友達との関係が悪化したからだろうと思っていたようだった。本当なプレッシャーが重荷になって仕方がなかったからである。あの時母親に「私の期待をかけないで」と言えていたら、本音で話していたら「よい子」から抜け出せたかもしれない。私にとって自分で切り開いていくきっかけをつかむチャンスだったと今、思う。でも私は恐ろしくてできなかった。私が反抗したら親が悲しむ、次第に「よい子」から「よい子」の仮面をかぶるようになった。「親を喜ばす為にいい点取らなくちゃ」などというプレッシャーはなくなる一方、親への不満を感じるようになった。しかしこれらの不満は口には出せず、心の中にためこんで行った。仮面をかぶりはするものの、やはり「よい子」の域は脱せなかった。反抗したり、自分の意見を通したくても「反抗しちやいけな。親に反抗しては」という心が勝り、何も言えず、何も変わらなかった。心の中ではこんな自分に対するイラだち、親への不満はつのっていた。「殺したい」と思うことも何回もあった。私は本当に殺したりするようなことはなかったが、親殺しをしてしまった「よい子」はこんな風に心の中に憎しみ、不満をためこみ爆発してしまったのではないと思う。こう考えると「よい子」の自分に中途半端に気づいてしまうよりは、自分がよい子だと気付かず、全くの「よい子」でいるほうが幸せかもしれないと思う。「よい子」の自分に気づき、それが嫌で抜け出そうと思っても、自分の「よい子」の部分が勝って反抗できず、自分へのいらだち、親への不満を心にしまっけて「よい子」の仮面を被ってしまう。それが悲劇につながってしまうのではないだろうか。私の場合はずっと心の中で「死ね」「殺す」などの言葉を言い続けていたためか、これらの言葉に何の抵抗も感じなくなってしまった。普段の会話でも平気で使うし、ムカついた時は誰の前であっても言う。

「よい子」の仮面をかぶることについて、私の経験で

いけば親が大きく関わっているのは述べた通りだ。両親とのケンカは実はしたことがない。叱られたことはあるが、お互い自分の意見を通そうとぶつけどうなことがないのだ。親とのつきあいかたが「よい子」の私を形成し、そして今に引きずることにつながったのだと思う。両親、特に父親は規律がきびしく、常に私たちを「子ども」として扱っている。…でも、いまだに親と本気で言い合いをしたことがない。あくまで親―子として接することしかできない。腹をわった話ができないのだ。私の「よい子」崩しはここで大きな壁にぶつかっている。本来はもっとそれが行われるべきだったと思う。また両親を一人の人間としてみるができない。一人暮らしをするようになって自分で考え、行動し、責任を持つことで私はようやく本当の自分をつくることができようとしているのだ。…

今の生活は今生きてきた中で一番楽しいし、初めて生きていることを実感している。以前は周りの反応が気になって仕方なかった。一人で何もできなかったのも結局は親の反応を気にしていちいち相談したせいだと思う。私が一人で決めるのはいけないとさえ思っていた。私の人生は私のものというこんな当たり前のことがようやくつかめた。自分をはじめて好きになった。…

このレポートを書くことで自分が今どうしたいのか、どうありたいのかが見えた。「よい子」の過去を振り返るのも嫌だった。講義を受けなかったら自分が「よい子」であったことも分からなかったと思う。自分のいままでいっていた思いも「よい子」をキーワードに分析することができた。もし親元を離れていなかったら…と思うとゾッとする。両親の思うように生きてきた私はまさに「よい子」だった。そんな自分に気づかせてくれ、過去を振り返るきっかけを与えてくれた先生の講義を本当に受けて良かったと思う。自分づくりの欠かせないと思うからだ。本当の自分、なりたい自分になる為に「よい子」の仮面を脱ぐ努力をしたい。私が行動することできると変わると思う。レポートを書いたことで改めて意思を感じた。こうやって「よい子」から抜け出し、自分づくりを始めようとしている学生は多いと思う。救われたと言ってもいいかもしれない。私のようにきっかけをつかんで変わろうとする人を少しでも増やして欲しいです。自分の人生は一度しかない。自分で歩いていくものだから。生意気なことを言っているかもしれませんが。でも私は先生の講義を受けて本当に良かったと思って

います。ありがとうございました。これから少しでも多くの人の心を救うきっかけをあげてください。」(ゴチックは、引用者、前島 2020 : 10-12)。

A さんは、ここで「親を殺したいと思うことは何回もあった」と述べています。本書第 2 章で詳述する『『よい子』の親殺し事件』でも明らかにしますが、多くの親殺しが、「よい子」への親の期待という「暴力」(芹沢俊介)に対する反撃としてあります。この A さんは、親殺し一歩手前まで行ったということになります。

「教育家族」の子どもたちへの親や教師の「期待」＝「抑圧」(oppression) は、1980 年代の「管理社会化時代」から、次第に強まってきます。

それが、以下に紹介する「子どもの権利条約市民・NGO」による、次のような説明です。

「つくる会は、過去三度にわたって代替的報告書を国連に提出し、子どもに加えられているプレッシャーの程度を測る指標としていじめ、不登校、校内暴力、および自殺の四つを用いてきた。いじめはプレッシャーの転嫁を、不登校はプレッシャーの忌避を、校内暴力はプレッシャーへの攻撃を、そして自殺はプレッシャーを感じる自分への破壊を意味しているからである。これら四つの現象が公教育から与えられているプレッシャーを原因としていることについては日本社会において異論が提起されたことはない」(前島、2020 : : 7-8)。

従って、1980 年代以降次第に強まってくる「プレッシャー」「抑圧」の中で、いじめが日常化し、第一の社会問題化を迎え、登校拒否も戦後第一の激増期を迎え、校内暴力や「非行」も戦後第二および第三の波を迎え、さらに自死も増加したのです。

親の「期待」という「暴力」に対して、「よい子」がとる道は二つしかないでしょう。一つは、反発し、反抗すること、もう一つは、「暴力」を受け入れ、自分の主体性を引っ込めることです。

この場合、反発および反抗は、親への家庭内暴力や「親殺し」となります。また、主体性を引っ込めることは、「よい子」を続けることです。つまり「自分を殺して親の意向を生きる、ということになると思います。『よい子』を生きたためには、自分の意思とか欲望とかを殺さなくてはならない。殺すことによって『よい子』を生き

るエネルギーを汲み出さなくてはならないのです。そこが『いい子』の辛いところです。ということは、晩かれ早かれ、どこかの時点で、殺すべき自分が枯渇してくるのを避けられないということで」1す。

「大体小学校四年生頃から遅くても高校二年生くらいの間で、枯渇してきてしまいます。たとえ枯渇せずにその時期を乗り越えたとしても、大学に入って動けなくなる。あるいは、職に就いて間もなく、息切れが始まるのです。…

子どもに『いい子』を求めるということは暴力です。『いい子』のパラドックスは、暴力の怖さです。子供の存在を根本から損なうことになる。その結果がどうなるか、親は子どもに『いい子』を求めるのなら、そのくらいの覚悟はしておくべきではないかというふうに思うのです。それほどの残酷さで子どもに接するのですから」15)。

ここで、「よい子」のエレルギーが枯渇し、登校拒否からひきこもりになったある青年の例を紹介しましょう。

「上山は、転校した後「いつの間にか、自分が誰にも評価されない存在になっていることに気づく。『新しく来た奴のくせに』そういう目線や雰囲気を感じる」。そして、『『優等生』をいつの間にか演じ始めた」(上山、2001: 26)。

『自分がどうしたいのか』よりも、『優等生はどうでなければならないのか』。人々の頭の中にある『優等生』というプロトタイプに合わせる知的配慮が、最優先となってしまう。窮屈だが、これしかわからない、ここで生き延びてここで生きていくやり方は」(上山、2001: 26-27)。

上山は、「優等生」＝「よい子」として生きていくことを決意します。そして、有名塾へ通い始めます。塾では、激しい体罰があったり、地図帳を忘れた罰として顔に黒々と油性マジックを塗られるなどの仕打ちを受けます。しかし、上山は、そういう仕打ちにもめげず、ひたすら有名高校(灘高校)→有名大学を目指しがんばります。

そのような上山に、「中学二年の十月、異変が始まる。朝、腹が痛くてなんどもトイレへ。必死の思いで学校へたどり着いても、チャイムが鳴り、『教室』という空間に閉じこめられた途端、息が詰まり、冷や汗。やがて、

下腹部に激痛がはしる。猛烈な便意。五十分の授業時間中に、二度、三度と手を挙げてトイレへ。」「さらに休み時間、こらえきれずトイレに行くと、男子たちに上から覗かれ、出口に三十人ほどで花道、出ていくと歓声と拍手。思春期のさなか、まわりに女の子もいる状況で、拷問のような日々がはじまった」(上山、2001: 40)。

上山は、このような身体症状に耐えきれず、間もなく中学校を登校拒否し始めます。そして、ようやく行った高校でも言語に尽くしがたい仕打ちを受けます。

「通学初日、オリエンテーション。ジャージに着替え、校庭で整列。『前に倣え!』いきなり殴られた。わけがわからない。『なんじゃ、その手の角度は!』腕が少し下がっていたらしい。怪訝な顔をしたら、『なんじゃコラ、その態度は!』さらにビンタ。パンチパーマで、薄いグラデーションのサングラス。ヤクザにしか見えない。恐怖で震えあがる。さらに、「建物の中に入る前に脱帽しなかった」(ため) 整列させられて順番にビンタ。生徒手帳には『男女交際禁止』『通学途中の買い食い禁止』『男子丸坊主』……。帰宅しても、理不尽に自分を殴った教師に腹が立って、何もできない。一日で行かなくなった」(上山、2001: 42-43)。

以上、上山の目指す「優等生」＝「よい子」像が、学校における「競争と管理」により崩れ＝「挫折」し、あるいは、「息切れ」し、登校拒否をする様子がよく描かれています。

ここで、「よい子」が作られるプロセスを知る上で役に立つ、一冊の絵本を紹介しましょう。

私は、授業で教材として絵本の読み聞かせを度々行います。また、絵本を用いた授業の成果として、これまで何冊かの本を出版してきました(前島、1998, 1999, 2014, 2015, 2016)。

まず、ここでは、学生に読み聞かせをしてこれまで一番共感を得てきた『コブタの気持ちもわかってよ』(作・小泉吉宏)を紹介したいと思います。

ママはいつも「はやくあるきなさい」という。/ボクは犬のことや花のことやまちのことを/もっとゆっくり見ていたいのに。/ケムシをうちへつれてかえったら/ママがとてもおこった。/カブトムシをつれてかえってもおこらないのに。/ボクはケムシもカブトムシも好き

なのに、/いじめられたことをパパにはなしたら/もっとつよくなれていった。/つよくなれるほどつよかったら/ボクはいじめられていないよ。/はやくかんがえるのはとくいじゃない。/パパやママやせんせいには/わからないことってないんだろうか。/こどもはみんなサッカーがすきなんだって/かっぴにきめてるせんせいがいる。/「きょう、さかあがりができたんだよ」/ママはいそがしくて聞いてくれない。/きょう、さかあがりができたのに。/たいせつなおもちゃをこわされてボクはおこった。/「あなたのほうがおにいちゃんなんだから/がまんしなさい」ってママはボクにおこった。/おこったきもちがボクのなかにとじこめられる。/ボクはきもちをはきだせない。/おおきなこえでなきはじめたとたん/「泣くな」っておおきなこえでおこられた。/かなしいきもちがボクのなかにとじこめられる。/ボクはかなしみをきだせない。/じぶんのきもちをうまくはかせない。/おなかがいいたい。/またパパとママがけんかしている。/ボクのせいかなあ。/ボクはこわくてだまってる。/ボクいいこになるよ。/だからそんないおこらないで。/いい子になればおこられないよね。/つかれちゃう。/パパにもママにもおこられたら/ボクはどこに行けばいいの？/コブタのきもちもわかってよ。

この絵本には、コブタが自分の気持ちを親や教師に受け止めてもらえない辛さ悲しさとともに、次第に「よい子」になっていくプロセスがリアルに描かれていると思います。そういう点が、多くの学生の心を打ち、共感されるのでしょう。

『コブタの気持ちもわかってよ』に対しては、ある学生は次のような感想文を書いています。

「今日紹介された絵本の中で『コブタの気持ちもわかってよ』が一番心に残りました。私の昨日、親に一日あったことをなどを話しました。母はいつも話を聞いてくれるのですが、昨日は仕事で疲れていて聞いてくれない、父は、私が話しているとすぐに首を突っ込んできて私の話を聞かずに話し続けていて嫌な気持ちになりました。

『コブタの気持ちもわかってよ』を読み、自分と重なる部分があり、とても共感できました。ひとが何か話したいと思っている時、相手に求めるものは、その話に対しての意見より、話を聞いてくれることだと思います。話を聞いてもらうだけで、気持ちは少しでも楽になります。私も相手が何か話したそうにしていれば、静かに話を

を聞いてあげたいです」(東京電機大学理工学部、2018年入学、女)。

この絵本や学生が描いた「よい子」に関する絵本を紹介しながら、「よい子」の問題に迫っていきます。

ここで、「よい子」について学んだ二人の感想文を紹介します。

『よい子』というのが、ものすごく自分に当てはまるなと感じた。私の家は、両親とも中学の先生で、私としては厳しく育てられてきた気がする。小さい頃、親に怒鳴られたことは何回もある。おかげで親の顔をうかがってしまうようになった。今でもそうなのかもしれない。自分のような家庭が他にもあるのか、インターネットで調べたこともあった。でも、出てくる記事は、私の親以上にひどい親の記事だった。友達には『反抗すればいいのに』と言われたこともあった。でも無理だった。親に怒られたくなかったからだ。初めて、親と喧嘩したのは、大学進学の時だった。最近やっと『よい子』を抜け出しつつある気がする。でも、心のどこかでは『よい子』を引きずりながら、生きている気がします」

(東京電機大学理工学部、2018年入学、男)。

「今回は『よい子』について学んだが、共感できる部分がたくさんあった。また、感動する場面もあった。私も『よい子』だったのかなと初めて感じた。何か間違えたり、悪いことをすると怒られ、叱られる。それは兄の姿を見て学んでいた。できるだけ親の負担にならないように『よい子』でいようと頑張っていた。でも『よい子』でいることを考えすぎて、じぶんの気持ちを素直に言えない人間になってしまった。何が食べたい、何がしたい、何を学びたい…なかなか素直に言えず一人で抱え込むこともあった。しかし、素直に言える勇気があればスッキリするし、気持ちも楽になることも学んだので、今は素直に自分の言葉で相手に気持ちを伝えられるように努力している。学生がつくった絵本などを拝見して、悩んでいる人、一人で抱え込んでいる人がたくさんいることを知った」(同上、2018年入学、女)。

この二人の学生の感想文には、「よい子」になるプロセスと同時に「よい子」から抜け出すヒントが隠されていると思います。

それは、前者は「親に対する反抗」であり、後者は、

「自分の気持ちに素直になること」です。

この、二つの事柄はそれぞれ、いわば、子どもが思春期の「第二の誕生」を迎え、親から自立していくときに大切な事柄です。

さて、この節の最後に、吉野弘の詩「奈々子に」を紹介しましょう。

「奈々子に
赤い林檎の頬をして/眠っている 奈々子。/お前のお母さんの頬の赤さは/そっくり/奈々子の頬に行ってしまう/ひとところのお母さんの/つややかな頬は少し青ざめた/お父さんにも ちよつと/酸っぱい思いがふえた。
/唐突だが/奈々子/お父さんは お前に/多くを期待しないだろう。/ひとが/他からの期待に応えようとして/
どんなに/自分を駄目にしてしまうか/お父さんは はっきり/知ってしまったから。/お父さんが/お前にあげたいものは/健康と/自分を愛する心だ。/ひとが/ひとでなくなるのは/自分を愛することをやめるときだ。/自分を愛することをやめるとき/ひとは/他人を愛することをやめ/世界を見失ってしまう。/自分があるとき/他人があり/世界がある。/お父さんにも/お母さんにも/酸っぱい苦労がふえた。/苦労は/今は/お前にあげられない。
/お前にあげたいものは/香りのよい 健康と/かちとるにむずかしく/はぐくむにむずかしい/自分を愛する心だ。」

この詩に対して、ある学生は、以下のような感想文を書いています。

「吉野弘詩集の自分を愛する心というのはとても感動しました。自分を愛する心というのは持っていないと、生きていくのにとっても辛いと感じました。自己肯定感を高く持った方が生きていくのが楽になると感じました。…」(東京電機大学理工学部、2017 年入学、女)。

私は、学生が、「よい子」のとらわれから自由になっていくためには、自分を好きになることあるいは、「自分が自分であって大丈夫」「自分の丸ごとをありのままに肯定できる感覚」＝「自己肯定感」(高垣)を育てることの重要性を強調します。

第4節：小括

序章の最後に、この章のまとめを行います。

序章では、本書のテーマである『現代社会の危機と若者犯罪-「よい子」はなぜ犯罪を起こすのか-』を深く

考察する上で、現在社会という新自由主義社会が、コロナ危機も踏まえて、今後どのような社会を構想していくべきかという危機＝分かれ道にあることを明らかにしました。

そして、その社会的危機＝分かれ道に当たって、ある意味社会的に形成されてきた「教育家族」の「よい子」が、様々な形で「行動化」を起こしていることを明らかにしてきました。それは、犯罪や「非行」であり、登校拒否やひきこもりであり、また、いじめであり、さらに自死でもあります。

いずれの「行動化」も戦後 1980 年代以降の「管理社会化時代」(高度消費社会)以降、増加し今日に至っています(ただし、「非行」は除く)。

それでは、「教育家族」の「よい子」が、なぜ犯罪を起こすのかという事柄の背景には、1980 年代以降の「能力主義」の高まりと「偏差値受験競争」の激化があります。

「よい子」は、「教育家族」の親(特に母親)の期待という「暴力」＝「抑圧」を一身に受け、ギリギリまで耐えますが、ついに耐えきれなくなると「暴力」＝「抑圧」の対象に向かうと犯罪、「家庭内暴力」「親殺し」、横へ向かうと「ホームレス襲撃事件」やいじめ事件、回避行動となると登校拒否やひきこもり、自己に破壊的に向かうと自死となると思います。

以下の各章では、それぞれの典型的な事件について詳しく検討していきます。何れにしても「教育家族」の「よい子」の若者犯罪は、今日の社会的な危機のどのような意味での反映なのか、また、「よい子」の若者犯罪は、どのような意味で社会的危機を自らの主体的危機として捉えているのかの分析が大変重要な課題になります。

註

1. 前島康男 (1995) 『いじめ—その本質と克服の道すじ—』(創風社)、同 (2003) 『増補: いじめ—その本質と克服の道すじ—』、同 (2015) 『大学教育と「絵本の世界」(中巻) —憲法・戦争・教育改革、3. 11 東日本大震災と子ども・教育、いじめ問題を考える—』(創風社)

参照。

2. 17 歳をめぐるはいくつかの本がありますが、当面次の文献参照。藤井誠二 (2000) 『17 歳の殺人者』(ワニブックス)。

3. 「親殺し」についてもいくつかの参考文献がありますが、当面次の文献参照。芹沢俊介 (2006) 『親殺し』(NTT 出版)。

4. 「教育家族」の定義は、「子の保育と就学の成功を家政上の最大の課題とする」(中内敏夫) というものです。具体的には、父親は「企業戦士」として、母親は「教育ママ」として、そして、子どもは「受験戦士」として、三位一体となって、子どもをよい 高校→よい 大学→よい 社会的地位に就かせるため、持てる財力を注ぐ家族だと考えられます (参照: 竹内常一 1987)。

5. 「オウム真理教事件」とは、1995 年の「地下鉄サリン事件」を最後とする、「松本サリン事件」「坂本弁護士一家殺害事件」などの一連の事件を指します。「ホームレス襲撃事件」は、1980 年代からありましたが、1980 年代のそれが、学校から落ちこぼされた少年たちの犯行とされたのとは異なり、2000 年代のそれは、普通の「よい子」の犯行とされます。参考、北村年子 (2009) 『「ホームレス」襲撃事件と子どもたち—いじめの連鎖を断つために—』(太郎次郎社)。また、「いじめ自殺事件」は、1980 年代の半ば以降、今日まで約 300 件起こっています。その中心は、中学 2〜3 年生。男女比は、7:3 で男子が多数です (前島 2015: 263)。

さらに、親殺しは、2006 年から 2013 年までの 8 年間で 50 件起きました。対象は、母親 6 割、父親 3 割、祖父母 1 割で、やはり「教育ママ」である母親が多数となっています。参照、間庭充幸 (2014) 『犯罪と日本社会の病理—破壊と生の深層社会学—』(書律クラレテ、74 頁)。

6. 間庭充幸 (1997) 『若者犯罪の社会文化史—犯罪が映し出す時代の病像—』(有斐閣選書)、同 (2005) 『若者犯罪—凶悪化の理想—』(世界思想社)、同 (2009) 『現代若者犯罪史—バブル期後重要事件の歴史的帰結—』(世界思想社)、同 (2014) 『犯罪と日本社会の病理—破壊と生の深層社会学—』(書律クラレテ) 他。

7. 「能力主義」について、竹内章郎は次のように規定しています。

「いわゆる『能力主義』とは、一般的には資本主義的・管理社会的な競争原理の中核をなす、支配のための原理であり、人間の差別・選別・序列化の近代原理である」(竹内章郎、2005: 124)。

8. 「偏差値」に囚われた例として、ある私立中学校に通っていた井上文の例を紹介します。

井上は、「中学生の頃、私は有名校を目指す優等生だった」(井上、1994: 11) といっています。井上は、次のように「偏差値」魔網に取り込ま

れた様子を振り返ります。

「中学生のころ『偏差値』という名の御民術にかかった…(中略)…最初のテストの偏差値地味低かった。それ以来だ。いつも頭の中に偏差値という数字が消えなかった。いまいましい数字を変えるために、私は参考書を開くようになった。

次第に、偏差値が上がっていった「だが、どうしてだろう。したいに虚ろな気持ちになった。成績の悪いところにはあいさつも交わさなかったクラスメートが、私のところへ来た。どの塾に行くようになったのか教えてほしい、とたずねた。仮面のような笑顔だった。

偏差値が上がったのは、何かを付け足したのではなかった。他のものを一つ一つ消してしまっただけのことだ。私の頭の中は、偏差値の数字だけが残っていた。

偏差値という数字のマジックを繰り返すうちに、私は御民術から覚めてしまった。中学三年のころだ。気がつくと、上等の数字を成績表に収めること以外に、私は何もなくなっていた。好きなものが何もなかった。偏差値に出会う前は、そうではなかったはずだった」(井上、1994: 16-17)。

以上のような経緯で、「偏差値」を上げることに疑問を持った井上は、同時に、有名高校を目指し、受験競争とよい内申書を書いてもらうための「よい子」競争に疑問を持ち始め、その疑問が身体症状として現れ始めます。

そして、ある日高校に行かないことを決意します。その後、しばらくして大学に進学しますが、やがて大学を中退します。

ここにも、井上の体験を通じて「よい子」の苦悩と自己形成の苦闘を見ることができます (前島、2020: 25)。

9. 宮崎勤についての詳しい分析は、次の文献参照。

芹沢俊介 (2006) 『<宮崎勤>を探して』(雲母書房)。

10. 「神戸児童連続殺傷事件」= 「少年 A」について論じた文献に以下のものがあります。

野田正彰 (1999) 『気分の社会のなかで—神戸児童殺傷事件以降—』(中央公論新社)。

「少年 A」の父母 (2001) 『「少年 A」この子を生んで……』(文芸文庫)。

草薙厚子 (2006) 『少年 A 矯正 2500 日全記録』(文春文庫)。

元少年 A (2015) 『絶歌—神戸連続児童殺傷事件—』(太田出版)。

藤井誠二 (2015) 『「少年 A」被害者遺族の慟哭』(小学館新書)。

草薙厚子 (2018) 『となりの少年 A』(河出書房新書)。

芹沢俊介 (2019) 『芹沢俊介 養育を語る 事件篇 IV』(株式会社オブコード研究所)

11. 大阪教育大附属池田小襲撃事件については、以下の文献参照。

岡江晃 (2013) 『宅間守精神鑑定書』(亜紀書房)。

芹沢俊介 (2019) 『芹沢俊介 養育を語る 事件篇 I』(株式会社オブコード研究所)

12. 「秋葉原無差別殺傷事件」について論じた文献は、以下のものがあります。

碓井真史 (2008) 『誰でもいゝから殺したかったー追ひ詰められた青少年の心理ー』 (ベスト新書)

芹沢俊介 (2008) 『若者はなぜ殺すのかーアキハバラ事件が語るものー』 (小学館 101 新書)

間庭充幸 (2009) 『現代若者犯罪史ーバブル期後重要事件の歴史的解読ー』 (世界史奏者)

岡田尊司 (2009) 『アベンジャー型犯罪ー秋葉原事件は警告するー』 (文藝春秋)

片田珠美 (2009) 『無差別殺人の精神分析』 (新潮選書)

長谷川博一 (2010) 『殺人者いゝゆゑに誕生したかー「十大凶悪事件」を獄中対話で読み解くー』 (新潮文庫)

芹沢俊介・高岡健 (2011) 『「孤独」から考える秋葉原無差別殺傷事件』 (批評社)

中島岳志 (2013) 『秋葉原事件ー加藤智大の軌跡ー』 (朝日文庫)

間庭充幸 (2014) 『犯罪と日本社会の崩壊ー破壊と生の深層社会学ー』 (書肆クラレテ)

芹沢俊介 (2016) 『愛に疎まれてーく加藤智大の内心奥深くに渦巻く悔恨の念を感じとるー視座』 (批評社)

芹沢俊介 (2019) 『芹沢俊介 養育を語る 事件篇Ⅱ』 (株式会社オプコード研究所)

また、犯人加藤智大の手記に次のようなものがあります。

加藤智大 (2012) 『解』 (批評社)

加藤智大 (2013) 『解+』 (批評社)

加藤智大 (2014) 『東拘永夜抄』 (批評社)

加藤智大 (2014) 『殺人予防』 (批評社)

13. 加藤智大 (2014) 『東拘永夜抄』 (批評社) 130。

14. 北村年子 (2009) 『ホームレス襲撃事件と子ども達ーいじめの連鎖を断つためにー』 (太郎次郎社) 426 頁。

15. 芹沢俊介 (2018) 『芹沢俊介 養育を語る 事件篇Ⅱ』 (株式会社オプコード研究所) 12-14 頁。

文献紹介 (以上の註で紹介した以外の文献)

1. 前島康男 (1995) 『いじめーその本質と克服の道すじー』 (創風社)

2. 同 (2015) 『大学教育と「絵本の世界」 (中巻)ー憲法・戦争・教育改革、3.11 東日本大震災と子ども・教育、いじめ問題を考えるー』 (創風社)

3. 同 (2020) 『登校拒否・ひきこもりからの“^{たびだち}出発”ー「よい子」の苦悩と自己形成ー』 (東京電機大学出版局)

4. 村山士郎 (2000) 『なぜ「よい子」が暴発するか』 (大月書店)

5. 富田富士也 (2003) 『「よい子」に育ててはいけないーくだらない

話ができる子ほど輝いているー』 (ハート出版)

6. 同 (2004) 『「よいこ」の悲劇』 (河出書房新社)

7. 香山リカ (2005) 『<よい子>じゃなきゃいけないの?』 (ちくまブリマイ新書)

8. 草薙厚子 (2005) 『子どもが壊れる家』 (文藝春秋)

9. 尾木直樹 (2008) 『「よい子」が人を殺すーなぜ「家庭内殺人」「無差別殺人」が続発するのかー』 (青灯社)

10. 岡本茂樹 (2010) 『「よい子」に育てると犯罪者になります』 (新潮社)

11. 加藤嘉三 (2019) 『人生の悲劇は「よい子」に始まるー一見せかけの性格が抱える問題ー』 (PHP 新書)

12. 竹内常一 (1987) 『子どもの自分くずしと自分づくり』 (東京大学出版会)

13. 藤井克徳 (2016) 『生きたかったー相模原障害者殺傷事件が問うものー』 (大月書店)

14. 朝日新聞取材班 (2017) 『安信ー相模原障害者殺傷事件ー』 (朝日新聞出版)

15. 月間『創』編集部編 (2018) 『開けられたパンドラの箱ーやまゆり園障害者殺傷事件ー』 (創出版)

16. 藤井克徳 (2018) 『わたしで最後にしてーナチスの障害者虐殺と優生思想ー』 (合同出版)

17. 雨宮処凛著 (2019) 『この国の不寛容の果てにー相模原事件と私たちの時代ー』 (大月書店)

18. 藤井克徳 (2019) 『いのちを選ばないデモーやまゆり園事件が問う優生思想と人権ー』 (大月書店)

19. 竹内章郎 (2020) 『いのちと平等をめぐる 13 章ー優生思想の克服のためにー』 (生活思想社)

20. 雨宮処凛 (2020) 『相模原事件裁判傍聴キー「役に立ちたい」と「障害者ヘイト」のあいだー』 (太田出版)

21. 竹内章郎 (2005) 『いのちの平等論』 (岩波書店)

22. 上山和樹 (2001) 『「ひきこもり」だった僕から』 (講談社)

23. 井上 文 (1994) 『制服のない青春』 (西日本新聞社)